「阿波木偶まわしを復活する会」の永年の伝承活動は、事態を一変させ、地域の誇るべき「神事芸」として評価が高まっている。

二〇一四年度には、調査活動は「阿波木偶箱まわし」伝承推進実行委員会と改称し、「伝承」に力点を置いた。その報告書には、伝承教室に参加した児童たちの感想文が乗っている。門付けに同行した児童の感想は、「訪問した家の全員の表情がみんな笑顔で、明るい感じがした」「徳島県の誇るべき伝統文化であることが分かってとてもよかったです。お正月になくてはならないものなんだな、と感じました」。指導している教師は「今なお続いていることに子供たちが誇りを持っている」との報告を行っている。

消滅の寸前までいった芸能が、こうして奇跡的に復活している。

**参考文献**


・「阿波木偶箱まわし」調査・伝承推進委員会『徳島県における「三番叟まわし」「えびすまわし」調査報告書―地域社会から見た門付け芸能―』（二〇一二年三月）
・「阿波木偶箱まわし」調査・伝承推進委員会『四国における「三番叟まわし」「えびすまわし」調査報告書―地域社会から見た門付け芸能―』（二〇一三年三月）
・「阿波木偶箱まわし」調査・伝承推進委員会『「阿波木偶箱廻し」調査報告書―箱廻しの足跡調査を中心として―』（二〇一四年三月）
・「阿波木偶まわし」伝承推進実行委員会『「阿波木偶まわし」伝承推進事業報告書―さらなる伝承に向けて―』（二〇一五年三月）


右記四冊の発行者は

〒779-3112　徳島市国府町芝原字神楽免一五八
「阿波木偶箱廻し」伝承推進実行委員会事務局


・辻本一英『阿波のでこまわし』（二〇〇八年　解放出版社）
・永田衡吉『日本の人形芝居』（一九六九年　錦正社）
・永田衡吉『生きている人形芝居』（一九八三年　錦正社）
・芳賀日出夫『神さまたちの季節』（一九六四年　角川書店）
・宇野小四郎『現代に生きる伝統人形芝居』（一九八一年　晩成書房）
・大和武生『阿波人形浄瑠璃物語』（二〇一二年　徳島新聞社）




## 書評

# 坂本要著『民間念仏信仰の研究』

鈴木正崇

本書は、長年にわたり、全国の民間念仏の調査を行ってきた著者の集大成である。調査期間はほぼ五十年に及び全国六百ケ所の現地を訪ね歩き、克明に記録をとり、映像にも収める仕事を地道に行ってきた。民俗学の王道ともいうべき精緻なフィールドワークの成果である。本書の事例の幾つかは、私自身も実際に現地を訪ね歩いたことがあるが、各地で展開する盆行事と、念仏や和讃、踊りや風流の数々に圧倒されて、個々の行事が複雑で、これを「民間念仏」の名のもとに一冊にまとめあげるのはかなり難しいと思った。著者は粘り強く調査を継続し、新しい資料も発掘しながら、何とか体系化までこぎつけた。まさに努力の成果である。従来の代表的な成果であった、佛教大学民間念仏研究会（編）『民間念仏の研究資料編』（隆文館、一九六六）、五来重の『踊り念仏』（平凡社、一九八八）と『五来重著作集』第七巻（民間芸能史、法蔵館、二〇〇八）、大森恵子の『念仏芸能と御霊信仰』（名著出版、一九九二）『踊り念仏の風流化と勧進聖』（岩田書院、二〇一一）などを凌ぐ大著に仕上げたことに敬意を表したい。著者は仏教民俗の研究だけでなく、東国の祇園祭礼、都市民俗、沖縄の芸能などに関しても深味のある調査を続けてきた。今後も終わることのないフィールドワークを続けて、更なる資料と考察が蓄積されるであろう。

本書の構成は以下の通りである。


第一章　民間念仏の系譜
　第一節　民間念仏の系譜
　第二節　踊り念仏の種々相
第二章　融通念仏と講仏教
　第一節　融通念仏と大念仏
　第二節　知多半島の虫供養大念仏と講仏教
第三章　六斎念仏の地方伝播
　第一節　全国の六斎念仏
　第二節　奈良県の六斎念仏
　第三節　若狭の六斎念仏
　第四節　平戸・壱岐の六斎念仏
　第五節　富士山周辺の祈禱六斎念仏
第四章　双盤念仏―芸能化された声明
　第一節　双盤念仏の概要
　第二節　神奈川県の双盤念仏（付　千葉県）

第三節　東京都の双盤念仏
第四節　埼玉県の双盤念仏
第五節　関西の双盤念仏（付　岡山県・鳥取県）
第六節　善光寺と名越派の双盤念仏
第七節　双盤念仏の成立と変遷
第八節　双盤念仏資料
第五章　大念仏と風流踊り―念仏踊りの二部構成
第一節　三遠信国境地区と周辺の大念仏芸能の概観
第二節　南信州の念仏踊り・掛け踊り
第三節　水窪大念仏と五方念仏
第四節　三遠信大念仏の構成と所作
第五節　奈良県十津川の大踊りから見た盆風流
第六章　傘ブクと吊り下げ物
第一節　伊勢・志摩大念仏と傘ブク
第二節　傘ブクと送魂儀礼
第七章　まとめ

本書の主題である民間念仏については、「民間人・在家の人々が中心に行う念仏で、何々念仏という名称で、念仏芸能や念仏講として広く行われている」（三頁）と定義する。歴史史料の中に、融通念仏・大念仏・六斎念仏・双盤念仏・念仏踊りとして記載されている民間念仏の伝播と変容を、現在、日本各地で実際に行われている念仏行事を訪ね歩いて明らかにしようとした。本書の意図は、あとがきによく書かれている。「当初、この本を民間念仏資料集として扱うべきか論集として扱うべきか迷いました。基本的には調査してきたものは公刊するという原則に則って、研究ノートとして発表したものが多く収められています。収められた資料の中には、現在伝承が絶えてしまったものも多く、ここに資料として記載した価値はあるのではないかと考えます。結果としては大部のものとなり、論としての展開や確認に詰めが甘い感は免れません。現状調査から入って歴史を遡る方法の限界ともいえます。だとしても、このような民間念仏があったことは伝えられるであろうとし、これを後世の伝承につなげていくことが、本書の役目と考えます」（八一五頁）。現地に赴き記録し、可能な限り資料を集めて各地の資料と比較し、類似と差異を手掛かりに、現在から過去に遡って源流を見極める。古典的な民俗学の王道である。

民間念仏の歴史は、年代を補って考えれば、以下のような流れかと思われる。念仏は天台宗の円仁（七九四～八六四）が中国五台山から比叡山に引声阿弥陀経と引声念仏を伝えたことに始まるとされる。その後、「百万遍念仏」が平安時代中期に現れ、良忍（一〇七三～一一三二）の「融通念仏」の思想と相俟って民間念仏は広まっていった。同時代には空也が現れ、市聖・念仏聖と呼ばれ、口称念仏の祖とされて民間



に念仏を広める動きも始まった（『日本極楽往生伝』十世紀後半）。空也について一遍（一二三九～一二八九）は「踊り念仏」の祖としたが踊りの記録はない。後世の空也派もしくは空也僧の変遷は一様ではない。京都の空也堂や福島県八葉寺の「念仏踊り」は江戸時代に復興されたものと考える。他方、『融通念仏絵巻』（十四世紀）には僧侶が踊る絵が描かれ、律宗の徒も踊っていたと推定する。鎌倉時代の蒙古襲来、文永・弘安の役（一二七四、一二八一）の頃に、一遍の「踊り念仏」が起こり、放下僧（ほうかそう）や暮露（ぼろ）が出現し、狂騒的な踊りや異形の者が現れ、人々の不安の受け皿として肥大化していった。遊行という一所不在の形態が、非人・芸能者・職人と共通する。鎌倉時代末期から南北朝時代にかけての遊行僧や異形人物の湧出をこの期の特徴とする。その後、時衆の主流派である藤沢遊行派では方式化され、儀礼化された。一遍の踊り念仏は鎌倉時代後期の二祖上人の真教（一二三七～一三一九）によって行道儀礼となり、江戸時代には「踊り念仏儀」に定まる。勧進僧による「踊り念仏」は勧進と布施を伴うが、僧侶にとっては修行であった。「踊り念仏」は時代によって変化し、特に室町時代末期から近世初頭にかけて「風流踊り」が爆発的に流行して、「踊り念仏」に大きな影響を与え、「念仏踊り」へと変化した。歴史的展開を以上のように推定した上で、現地調査から過去へと遡る道筋をみつけていく。主な流れを以下のように整理した。

①「念仏踊り」の歴史的展開を探る。「念仏踊り」の多くは前半の「唱えるだけの念仏」と後半の踊りの念仏の二部構成である（若狭の六斎念仏、三遠信大念仏、伊勢志摩大念仏）。「唱えるだけの念仏」を「大念仏」という地方もある（伊勢志摩、三遠信の一部）。「融通念仏」の流れであるが、踊りは要素から見ると「風流踊り」で、「風流踊り」は傘を中心とした輪踊りからなり、傘ブクを伴う所がある。「風流踊り」は盆の「念仏風流」から始まり、「踊り念仏」の影響はあるが、そのまま「念仏踊り」になったとは考えにくい。理由は念仏のみを唱えながら踊ることは少ないからである。「大念仏」は引声系で声を長く伸ばす唱えで踊りには適さない。「念仏踊り」は風流踊りであり、「風流系念仏踊り」とした。引声系の唱えに踊りが付け加わった（第五章）。

②傘についての考察を志摩の「大念仏」に基づいて行う。この地域では傘ブクと称して死者の遺品や髪の毛を吊り下げて死者を送る習俗があり、吊り下げ物には祓いや災疫を送る意味がある。傘ブクは祇園祭の傘鉾が盆の風流に展開したと考える。その内容は、陰陽道の撫で物や神社の大祓いに通じ、死者の魂を送る習俗と習合し、海岸部では傘と吊り下げ物を共に海に流すことになったと推定した。傘ブクと吊り下げ物に関しては、本書に収録されていないが、会津地方を中心と

した詳細な調査があり、「山・鉾・山車」などの風流との影響関係や地域ごとの独自の発展など今後の展開が期待できる（第六章）。

③「融通念仏」の村落への展開を探る。唱えを中心とした「融通念仏」は、講仏教という形で村落への定着が進んだ。愛知県知多半島の「虫供養大念仏」の事例を広く集めて、近世初頭からの展開と推定した。良忍を受け継いだ法明は「融通念仏」を発展させたが、初期真宗と同様に、決まった寺を持たない道場様式と、在家の「禅門」という念仏行者の二種の形態があった。知多の事例の「挽き道場」と「阿弥陀ばんさん」はその流れである。後者のように半僧半俗の者が僧侶役をするのは、真宗の毛坊主と類似する。良忍はこの地方（東海市富木島町富田）の誕生とされ、布教を行ったという伝承があり、融通念仏の徒が布教して虫送り大念仏の基礎を築いたと考えた。現在の虫送り大念仏に「百万遍」や「六斎念仏」があるのは、「融通念仏」が源流にあることの現れと推定する（第二章）。

④「融通念仏」から「六斎念仏」への流れを探る。五来重は高野山で念仏が高唱したことや雑行として踊りを伴うなど本来の念仏行が変化し、持斎を厳しくした念仏復興運動ととらえた。この見解を受けて、六斎念仏の地方伝播と変化を、奈良県北部や若狭で再度検討し直し、新たに平戸・壱岐、富士山周辺の事例を詳しく調査して紹介した。富士山周辺では山中湖平野や道志無生野が知られていたが、修験の影響の色濃い祈禱六斎念仏のような民間念仏が数多く伝わっていることを明らかにした（第三章）。

⑤双盤念仏の歴史的展開を関西、神奈川、東京、千葉、長野などの広範な比較で究明した。通説では双盤念仏は、宝徳二年（一四五〇）前後に京都真如堂の十夜法要に始まり、明応四年（一四九五）に鎌倉光明寺に伝わり現在に至ったとされる。しかし、文献に基づく限り、当時、引声阿弥陀経と引声念仏は伝授されたが、双盤鉦は未使用と判明した。現時点での最古の双盤鉦は万治二年（一六五九）で、鎌倉光明寺の什物帳の双盤鉦（原文は惣番鐘）は元禄十二年（一六九九）で、この頃が双盤念仏の始まりである。光明寺では現在では、引声念仏に続いて在家による雲型鉦を使った「六字詰め念仏」が唱えられ、山門の中二階では在家が四枚鉦を並べて叩く双盤念仏が行われる。団体参詣者の場合は、僧侶が法要の入退堂の合図鉦を「きざみ叩き」で叩く。これは善光寺や名越派と同じ手法である。双盤念仏には雲版鉦と双盤鉦があり、双盤の枚数も一枚、二枚、三枚以上の多数鉦など様々である。光明寺の「六字詰め念仏」は、延享二年（一七四五）の文献では合殺（がっさつ）という声明が入っており、古い「百万遍念仏」に遡る可能性もある。引声阿弥陀経と引声念仏は、複雑な変遷を辿って鎌倉光明寺に伝わったことが分かった。他方、滋賀県安土浄厳寺には天正七年（一五七九）の創始とされる雲版鉦と双盤鉦で叩く楷定（そてい）念仏が伝わる。鎌倉光明寺の「六字詰め念仏」では雲版を使い滋賀の楷定（そてい）念仏の伝播が推定されるが経緯は不明である。光明寺では引声念仏の伝承が絶えて享保十一年（一七二六）に真如堂から再伝授されて中興されたと伝えられており、その時に付随した可能性がある。ただし、現在では真如堂の十夜念仏は雲版鉦は使用されない。大きな流れは、役僧の二枚鉦から在家の多数鉦へという変化であり、在家による双盤念仏の成立は享保年間（一七一六～一七三六）とした。現在は、在家の双盤念仏には、法要の中で唱える「役鉦」と、法要と法要の間の「平鉦」がある。「平鉦」のことを一般に双盤念仏とも呼ぶ。双盤念仏は、幕末から明治大正期には、双盤講や双盤念仏が声や技を競った。「平鉦」の念仏は、引声念仏系統の崩しと推定する。双盤念仏は、引声念仏に始まり、双盤が加わって民間に下降し、芸能化して双盤念仏となったと説く（第四章）。

最後に日本的念仏の特徴をまとめる。結論から言えば、民俗と習合した念仏は踊る念仏と唱える念仏で、特徴は念仏の身体論であるという。最初に、民藝運動の創始者として知られる柳宗悦（一八八九～一九六一）の『南無阿弥陀仏』（大法輪閣、一九五五）に注目してその語句の幾つかに共感を表明する。柳は日本の浄土思想の法然・親鸞・一遍という念仏の深化の流れの中で、法然を観想念仏から口称念仏への革命を起こしたと評価し、親鸞も民衆化に大きく貢献したが、最終的には一遍こそが念仏の日本化に成功したとして頂点に置く。柳の幾つかの言葉が引かれる。「下品（げぼん）の者の称名こそは、仏の大願力が働く場所なのである」「念仏は口称でなければならない。「念」といえば即ち「声」なのである」「口称に依ることは絶対の他力を立てることである。口称の時、人は己を見てはならぬ。仏をのみ見つめるべきである。仏自らをして残りなく仏たらしめることである」。柳のこの言葉は西山上人証空とその弟子であった一遍とほぼ同じだといい、称名については、「ここで自我が消え去るのである。心理的に見れば、心が無心の状にうつるのである」と述べる。柳の言葉は、一遍の「念仏が念仏を申すなり」「名号が名号を聞くなり」「南無阿弥陀仏の中には機もなく法もなし」「自力他力のうせたるを、不可思議の名号ともいうなり」と照合しあうという。念仏という行為の中に自己を消滅してしまう。声を発する主体もない。柳の説き方は、念仏の語を民藝に置き換えても同じである。柳は「念と言えば即ち声となった」ともいう。浄土教は、法然から一遍へと深みを増していき、一遍では唱えることから歓喜して踊る、体そのものが念仏になると説く。柳の師である鈴木大拙は、『禅と念仏の心理学的基礎』（大東出

版社、一九三七）で、「ナムアミダブツ」という言葉を音声と意味作用に分け、念仏の無意味作用について述べて、念仏は発声そのものという行為・行に意味があるとした。著者は柳宗悦や鈴木大拙の見解を入れて、「念仏の日本的展開もしくは日本的念仏といえる。特徴は念仏の身体性を強めたことになる」（七八三頁）と結論付ける。同様の思考は民俗学者の折口信夫が『言語情調論』（一九一〇）以後、一貫して説いてきた「言葉は音で聞く、文字では考えない」という主張とも重なる。結論の最後に「念仏は「南無阿弥陀仏」でなく「ナムアミダブツ」なのである。音としての「ナムアミダブツ」、もしくは身体表現を伴っての「ナムアミダブツ」といえる」「民俗を非文字伝承の文化とすると、「ナムアミダブツ」という口称と踊りに収斂された日本的念仏というのは、まさしく民俗に通底しているといえよう」（七八三頁）と述べて、民間念仏は民俗そのものであったと述べて終了する。

本書はたいへんな労作であり、民間念仏の研究に関して本書を上回る水準のものが今後出現することはまずないであろう。後続者は全て落穂広いになってしまう。しかし、民間念仏は大きな広がりを持っており、本書の場合は、地域としては東北が手薄である。出羽三山講と関係の深い千葉の天道念仏、羽黒山伏からの伝来を伝える岩手の念仏剣舞、岩手の太鼓念仏、和讃念仏、念仏舞、各地での個性的な念仏踊り（西馬音内など）がある。ただし、いずれも中世史料は乏しく、関西地方や三遠信との関連を比較して詳細を探ることは難しい。伝播の道筋や文脈も全く別の発想で考える必要がある。

本書は資料集の性格が強い。膨大な資料からの一般化はかなり難しい。本書を理解するには日本仏教史の基礎的な知識、特に浄土思想や浄土教の発展についての知見が必要である。そして、何よりも個々の民間念仏の事例の現地での見学や民俗調査の経験がないと内容の理解は難しい。方法論的には本質主義で、日本に中国から伝来した引声念仏の伝統は現在もどこかに残っていると考える。起源が明らかなことを根拠に、過去から現在への連続性が無意識に据えられ、現在の民俗の中に「残存」を読み解こうとする。他方、これとは逆に現行の民間念仏の現状を比較検討し、年代がわかる史料を手掛かりに、現在から過去に出来るだけ遡ろうとする。この場合は、フィールド経験の蓄積に基づく直観による類似と差異の判断が手掛かりである。かくして議論の中で、通時的と遡及的という逆方向に向かう二つの時間のベクトルが交錯する。記述は理路整然というわけにはいかなくなり、迂回路も各所にあるので、読者は文脈や年代を補って筋を読み取る努力を強いられることになる。民俗の複雑な事例を文脈を含めて他者にわからせる記述は難しい。

本書の中には複数の歴史観と資料が含まれている。調査時



の研究者の「民俗学的現在」（folkloristic present）、過去の民俗学者の「累積された民俗報告」（accumulated folkloric documents）、限られた歴史文書史料（limited historical documents）、伝承者に相承された「口頭伝承」（oral tradition）、伝承者の「記憶の身体技法」（memorized body techne）、「共時的な映像民族誌」（synchronized film ethnography）などが重層化し混淆している。恐らく最後の結論部で、柳宗悦に依拠して、念仏の身体化を論じたのは、複雑性を一気に解き放つ一般理論の構築への欲求があったからであろう。華厳と禅と浄土を結合させた信仰者である鈴木大拙の直系の弟子というべき柳宗悦は、民藝の発見、木喰の発見、そして念仏でも、直観的に二項が矛盾しつつ相補的に展開する「即非」の論理を働かせていた。事事無礙法界（じじむげほっかい）や「大悲即大智」に始まり、日本的霊性に展開した大拙の思想は、柳の実践的思考の中に流れ込んだ。柳は大拙と同様に、独自の眼で東洋を西洋との対比でみる思考方法を、モノと実践を通じて養った。両者は、念仏だけでなく妙好人というヒトにも惚れていた。ただし、念仏の身体化は、大拙や柳の思想だけでなく、煩悩即涅槃を説き仏性を重視する説く天台本覚に基づく修行と深く結びついていたことも忘れてはならないであろう。

本書の結論で、教義を超える民衆の思想や身体観や音響観が出現するのは、唐突ではあるが必然的帰結でもあった。そして、本書は民衆の想像力を重視する卓越したフィールドワーカーによる、民間信仰への共感と哀惜の書としても読むことが出来る。

（法蔵館　二〇一九年一一月　A五判　八八〇頁　一七〇〇円＋税）